

令和4年8月28日

南の風アカツキジャパン女子日本代表特集号Ⅴ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

ラトビア代表との第2戦目です。日本代表は、スターターを1戦目とはガラッと替えてきました。

15番本橋 (PG)、75番東藤 (SG/SF)、88番ひまわり (SG/SF)、52番宮澤 (SG/PF)、10番渡嘉敷 (C) という布陣です。

立ち上がり日本は第1戦目の教訓を生かし、ラトビアのP&Rからのキックアウトにアジャストし3Pシュート打たせない。オフェンスでは3Pシュートに拘らず、ペイントドライブアタックで果敢に攻めた。ひまわりのギャロップステップからのエクステンドシュートや、東藤の力強いドライブからのバックショット、宮澤の3Pに反応した渡嘉敷のリバウンドシュートが光った。さらに交代した、高田、オコエ、平下もディフェンスの強度を上げ、相手の3Pシュートを抑えてドライブを誘い、ヘルプカバーする作戦がハマっていた。

ラトビアはパブキナの1on1のドライブシュート、合わせからのグルベのゴール下シュート、ヤサの3Pシュートで得点を上げる。

その後日本は交代した宮崎が3Pシュートを決めると、平下も3Pシュートを沈め会場を盛り上げる。ラトビアのゾーン(2-3)に対しても、宮崎が再びディープ3Pシュートを決める。また、オコエの3Pシュートに反応したステファニーがリバウンドに飛び込みシュートを決める。

負けじとラトビアもP&Rからポールベレが3Pシュートを入れ返す。ゴール下でセンターのミスティアンコもリバウンドをがんばる。終了間際宮澤の3Pシュートが決まり、第1Q23対20で日本がリード。

第1Qを観て感じたことは、日本はラトビアのP&Rに対するディフェンスの違いです。第1戦ではスイッチで対応することが多かったのですが、個々の第2戦では、ショーハード(スクリナーのディフェンスがユーザーのドライブを守るようにショウディフェンスして、またもどってスクリナーに付く)で対応していました。これはワールドカップを想定して、P&Rの守り方を試しているのだと思いました。相手のオフェンスの特徴に合わせて守るということです。

またボールマンディフェンスに対する、徹底したボディアップ(ディスタンスを1/2アーム以下)はこの第2戦でもしっかり継続していました。

気になったことは、相手の25番ミスティアンコ選手(194cmセンター)にポジションを取られ、リバウンドに行かれたことです。サイズのある選手を如何に守るかは、日本代表の大きな課題です。第2Q以降を注視していきたいと思います。

第2Qは開始直後、ラトビアのゾーンディフェンス(2-3)に対して、東藤が左コーナーから3Pシュートが決める。立ち上がりから順調に見えるが、それ以後ゾーンを攻めめぐむ時間帯が続く。5人が外でボールを回し3Pシュートを打つという、やや淡泊な攻めになった。その間、東藤の2本目の3Pシュートが決まる。選手交代があり、ステファニーのエンドラインドライブや、終了間際、渡嘉敷と朝比奈のゴール下の合わせ見事に決まる。第2Q終了43対31日本がリード。このクォーターも、ボックスアウトに課題(相手のオフェンスリバウンドに対して)を残す結果となった。